

川崎医科大学附属病院 開院日、カルテ番号第1号の患者



川崎医科大学附属病院 開院の日、2階外来受付前にて。
 初代病院長は川崎祐宣理事長（中央背広姿）自らが務めた。
 向かって右となりは柴田進副院長（後の第2代病院長、第3代医科大学学長）

■理想的な医学教育、臨床教育を

川崎医科大学は、医学教育の改革と良医の育成を目標として1970年に開学しました。その理想とする新しい医学教育及び臨床教育の実現、加えて医療短期大学やリハビリテーション学院での有能なメディカルスタッフの養成には、理想的な附属病院が不可欠でした。

■川崎病院を母体として

医科大学設立が着想された頃、川崎病院^{*1}は入院800床、外来1,500名で「日本に於いて最高水準の病院。名実ともに私の病院の最高最大のモデル病院」^{*2}と言われるほどでした。その川崎病院を凌ぐ附属病院を創りあげるため、1969年には川崎明徳先生（現学園長）の一行が欧米の医療教育事情を約1か月にわたり視察するなど、準備が進められました。

医科大学が開学してからの約3年間、臨床医学担当の教員は、川崎病院で診療に励みながら、新しく松島の丘に建設中の附属病院の完成をひたすら待ちました。

■開院の日 1973年12月17日月曜日

開設許可は1,052床ながらも、使用許可はわずかに13室48床で、巨大な病院の建物のうち14階の一部を入院患者の病床にしてスタートしました。開院初日は、外来患者42人、入院患者3人でした。

当日の様子を学園の資料からご紹介します。

●当時 小児科助教授だった守田哲朗先生の述懐^{*3}

この日は病院全体で3名の入院でしたが、その第1号が小児科からの“川崎病(急性熱性皮膚リンパ節症候群)”でした。スタッフ一同、この偶然な出来事にすっかり感じ入りました。

●当時 皮膚科助教授だった植木宏明先生の述懐^{*4}

準備して外来おりましたら、川崎祐宣先生が歩いて来られて、視察かと思ったらそうじゃないんです。カルテを掲げて来られて、「先生、見て頂戴」と。A-00001号は川崎祐宣先生です。「私は患者として来たんです。先生、体がかゆいんです」。岡山の川崎病院には御令息の月野木清徳先生がおられたんです。「月野木先生はなんとおっしゃったんですか?」と言いましたら、「いや、いろいろ文句を言うんだぞ。お風呂に入って石鹼とたわしでこする。それがいかんと」と私のところでも言われて、「先生、やっぱり同じですよ」とお答えしました。「とにかくかゆいんですよ」と、先生は第1号のカルテを持って、患者さんとして来られたということです。

*1 : 川崎医科大学総合医療センターの前身。1938年に医師2名の夜間診療所（外科昭和医院）としてスタート。

*2 : 増改築工事が全館完了した1966年の落成式での岡山県医師会長の祝辞より。『回想の八十年』収載。

*3 : 「川崎学園だより」2004年8月号掲載の「川崎学園創設のころ」の中で。執筆当時、川崎医療短期大学学長。

*4 : 2006年5月27日「川崎祐宣を語る」の講演の中で。講演当時、川崎医科大学学長。『川崎祐宣の遺産』収載。